

ジョージ・オーウェルと現代

——『一九八四年』をめぐる——

照屋佳男

一 はじめに

「正気は統計的なものではない」これはジョージ・オーウェル (George Orwell) の長編小説『一九八四年』(Nineteen eighty-four, 1949) の主人公ウィンストン・スミスが発する言葉である。「統計的」は「公的」の意で、従って「正気は公的なものではない」あるいは「正気は公的なものには存しない」と言い換えてもよいのである。正気はそれではどこに存するのか。無論それは「私的なもの」にしか存しない。

事実、オーウェルの小説やエッセーを読む者は、私的なものが△価値▽に他ならない事を、くりかえし悟らせられる。スポーツにしても、私的に行われる限りは、余分のエネルギーを発散させるといふ効用を持つけれども、ひとたび国際試合などという公的なものとなるや、ただでさえ熾烈な悪意や敵対心を煽り立てずにはおかず、「狂気のような憎悪」⁽¹⁾を生みだすのが落ちである、とオーウェルは考えていた。けれども賢しかな現代の読者の多くは、そういう

事は先刻承知している、それは事新しく説かれるには及ばない、などと言って、オーウェルを凡庸な作家と決めつけるに相違ない。なるほど「個の尊厳をイデオロギーとして確立せよ」と説く手合がマス・メディアにわんさと登場するのであって、彼らは個（即ち私的世界）とイデオロギーが水と油の如く相容れないものである事に気づかぬ程、個の性質に鈍感なのであり、彼らがたとえば日本の戦前は滅私奉公の時代であったと言い切る時、彼らは、自らをイデオロギーという名の「公」に隷属させて△滅私的に▽振舞っている、と言ってもよいのだ。

政治が万人の手に届くようになって以来、人間の生は、凡そ公的なもの——イデオロギーであれ、その他何であれ——によって限りなく侵される危険に曝されている。我々は、実際、私的なものを守る術を身につけぬまま、政治万能の時代に突入したとも言えるわけで、アメリカのすぐれた文芸批評家ライオネル・トリリングが言っているように、オーウェルは現代の政治に対処する術を読者に教えた点でも際立って重要なのである。

ところでオーウェルは「一九三六年以来、私が本腰を入れて書いてきた作品はすべて、その一行一行に至るまで、直接的にせよ、間接的にせよ、全体主義に反対し、私が理解する通りでの民主社会主義を推進するためのものであった」と書き、「今の時代がすべての人に押しつけてくる本質的に公的で、非個人的な諸々の活動」⁽²⁾に対しては、その嘘を暴き事実が何であるかを読者に悟らせるというやり方で対応するに如くはない、という意味の事を述べる。これによって読者が理解するのは、オーウェルが物を書くという△信念の行為▽を公的なものに、即ち全体主義への傾向を帯びた現代の政治に、対置していたという事だが、忘れてはならないのは、書くという行為は小説家オーウェルにとっては、「美的経験」でもなければならなかったという事だ。そして「美的経験」に必須のものは「子供の頃身につけた世界観」であり、「散文への強い愛着」であり、「地球の表面への愛、堅固な物体や夏炉冬扇の如き情

報の断片への喜び」であり、「深く心に滲み込んだ好悪の感情」であった。これを要するに、オーウェルが公的なものに根柢的に対置したのは、新たな政治理論の類ではなくて、△私であり、△私に自ら具わっている「ごく普通の真っ当な感覚」(common decency)であった。ここから次の定言、即ち「政治や社会の形態がいかなる種類のものであれ、人間社会はごく普通の真っ当な感覚を基礎としなければいけないのであり、その事を悟れない現代の知識人は恐ろしい」という定言までの距離は、ほんの一步と言っている。そして世論や政治の動向に決定的な影響を与えるのは、公的なものにどっぷり身を浸し、「真っ当な感覚」を紛失した知識人である事を考えると、現代の知識人を恐ろしいとするオーウェルの気持に偽りのない事が、自ら明瞭となってくるのだ。

オーウェルは、公的なものが充滿する大都会ロンドンに、年々歳々暮が春の到来とともに姿を現す事への賛嘆の情を吐露したエッセーのなかで問うている、「春やその他の季節の到来を喜ぶのは悪い事だろうか。もっと正確に言えば、それは政治的に咎められるべき事だろうか」と。そう問う事自体が現代の知識人への痛烈な批判となっているのであり、この問が空疎でない事を知るためには、次のような言説、即ち資本主義の「圧制」の下で人々が苦しんでいる限り、生の実際の営みに喜びを示すのは階級的視点の没却を意味するから有害だ、という言説を思い起こささえすれば、よいのである。この種の言説をなす者によれば「人間は不満をこそ抱くべきで、要求を倍加するのが人間の務めであり、自然に対して人間が既に抱いている喜びを単にふやすなどは人間の務めではない」という事になる。ここで自然に対する喜びと言われているものは、紛れもなく「私的世界」の構成要素なのだ。政治的人間は、ユートピアの実現のために私的世界は犠牲に供されて然るべきだと説きがちだが、これに対してオーウェルは「春がめぐり来るのを喜べないようだったら、ユートピアが実現しても仕合せになれるはずがない」と言う。「樹々や魚や蝶や蟬に對

する幼少の頃の愛を保っていれば」平和で真つ当な未来の確保が可能となるが、「鋼鉄やコンクリート」（別言すれば専ら政治的に有意義と思われる事）しか愛してはならない、と説くような真似をすれば、人々が憎しみと指導者崇拜にしかエネルギーの捌け口を見出さぬ時代の到来は必至である、と言うのだ。⁽⁹⁾ そのオーウェルは、他ならぬ『一九八四年』において、私的世界が廢絶され、人々が憎しみと指導者崇拜にしかエネルギーの捌け口を見出せぬ「ユートピア」を描いている。

二 「私的世界」と「歴史教育」

ある批評家は『一九八四年』を評して「一人の人間によって、かつてこれほど恐るべき警告が発せられた事は、ない」と述べているが、オーウェルがこの本で為し遂げようとした事の一つは、いわゆる「歴史教育」によって過去が廢絶されるという、現代に固有の現象に読者の注意を喚起する事であった。

考えてみれば過去とは頗る私的なものであり、過去が甦るとすれば「思い出す」という私的な行為を通じてである、と言える。思い出は元来センチメンタリズムとは無縁のものであって、思い出すという行為は生きた時間に人が棲息する事と切り離しては考えられないものなのだ。過去から現在を通して未来へのっぺらぼうにのびた時間（過去から未来に向って鉛の様に延びた時間）と小林秀雄は言う、歴史の必然とか歴史の潮流とか称せられるそういう時間は、死んだ時間であり、死んだ時間を専ら相手にする「歴史教育」は、思い出の抹消の上に成り立っている、とここで言ってもよい。そして思い出の抹消はブライバシイ（私的世界）の破壊と一体不可分のもので、『一九八四年』

で描かれる「ユートピア」オウシアニア國の人民は、思い出を抹消されているが故に私的世界を徹底的に剝奪されているとも言い得るのである。

プライバシーとは風変わりな事をする自由の意では勿論なくて、ただ夏の夜など男と女が裸になって愛し合い、好きないようにしゃべり、窓に立ち上ってくる子供の叫び声に耳を傾けたりする自由、純粹に自己のものと呼べる時間の中に生きる自由、あるいはただ単に孤独である事、を意味するに過ぎないのだが、そうした一切が、『一九八四年』の「ユートピア」においては、異端視されるに至っている。私的世界の代名詞とも称すべき家庭も、私的領域である事を止めて久しいのだが、「党」は、親は子を愛さなければいけないと言う。これは一見すると家庭尊重の言とも受け取れるが、しかし党は他方で、子に対しては、親に反抗せよ、と体系的に教え込み、家庭を秘密警察の延長物と化しているものであり、かくして子は親を監視し、親の政治的偏向をかぎつけ次第、党に報告するという仕組みが確立するに至っている。

このようなプライバシーの破壊の描写を通じて作者が示そうとしているのは、他でもない、価値は私的世界にしか存しないという事だが、価値をそのようなものとして捉える事は、無論、作者の価値観の貧寒を証するものでは決してない。パスカルが「人間の不幸はすべて、次の一事、即ち部屋の中に静かに休んでいられないという一事から生ずる」と言っているが、価値はそういうものとして意識されてきたのだし、そういう価値を措いては、人間の正気（あるいは常識）も保てようはずがないのである。けれどもユートピアの提唱者たちは、きまっ、て、そういう価値を異端として、あるいは少なくとももうさんくさいものとして、斥けるのであり、そこに「この世の天国」として構想されたものが何故にこの世の地獄に他ならぬものに転ずるのかを解く鍵も見出されるのだ。

全体主義国オウシアニアの支配政党にとって「異端中の異端は常識である」⁽¹²⁾、即ち党にとっては真つ当な感覚こそが最も忌むべき異端であり、それ故「党は、目と耳が明瞭に捉えるところのものを否定せよと教える」⁽¹³⁾事を、神聖な義務にまつりあげている。既に明らかのように、真つ当な感覚の働きを保証するのは「正しい世界観」では凡そなく、私的世界なのだが、その事を知り抜いているが故に党は、私的世界を破壊してやまないのだ。そして私的世界の破壊によって、2 + 2 = 4、石は固い、何らかの支えなしでは物体は地球の中心をめざして落下するといった類の理解すら不可能となるのだが、無論いかにも全体主義国らしく、軍事科学とスパイ科学の分野では、感覚を基にした理解が許容されている。

『一九八四年』は主人公が党の圧倒的な力に逆らって、己れ of 感覚の教えるところのものに忠実であろうと努力する事、つまるところ己れ一個の世界を築こうと努力する事自体を、ストーリーの発端にした小説である。まず主人公は一九八四年のある日、日記をつけ始める。そもそもノート・ブックの類を所有する事自体がこの「ユートピア」においては犯罪となりかねないのであるから、帳面に実際に日記をつけるという私的行為に耽っているところを発見されなどしたら、その者は、死刑または最低二五年の強制労働の刑に処せられて当然という事になっている。けれどもいかにも全体主義国らしく日記をつけるという行為は、法律で禁止されているわけではない。

さて、主人公は日記をつけているうちに、当然の事ながら、過去の出来事を思い出すといまひとつの私的行為に導かれるに至る。これが党にとって危険極まる異端の行為と映るのは、歴史家ゴロ・マンが言っているように、個々人の内部から過去——過去の美や過去の価値——を奪う事なしには、絶対的な権力は維持できないからである。

主人公が党のイデオロギーから脱する事ができるのは、幼少の頃の印象を思い出す事によって、「革命」前の伝統的なイギリスを思い出す事によって、本当の過去に通じる歴史的眞実に参与する準備をする事によってなのである。⁽¹⁴⁾

人間の自由は過去を誠実に思い出す事と緊密に結ばれているとゴロ・マンは言っているのだが、もしも主人公が、つかの間によせよ、過去を思い出す事をしなかったならば、主人公は党の「歴史教育」を通じて教え込まれる過去を、唯一の過去として受け容れていた事だろう。明らかに「歴史教育」は、主人公の内部においては、思い出や伝統の意識と真っ向から対立するものと受け取られている。思い出すという私的行為の意義を悟るに至った主人公はそこで思うのだ。「党が過去に手を突っ込んで、これこれの事件は決して起こりはしなかったと言う事が、単なる拷問や死よりも恐るべきものである」と。⁽¹⁵⁾

主人公の思い出というのは、肅清で父親が消えて後、極度の栄養失調から死んでいった母親と妹にまつわるもので、その思い出の核心は、主人公が、三〇年前の母親の死が悲劇的でありえた事が、今の世界と当時の世界とを区別する決定的な要素、と悟る点に存するのである。悲劇は、私的生活や愛や友情の存する世界においてのみ、また家族の者が互いに理屈抜きで庇い合う世界においてのみ、起こりうる、と主人公は考えるに至るのだが、一九八四年の全体主義国においては、同志はあっても友人はなく、党への忠誠はあっても愛や私的な忠節はない。家庭にしても、親にとつては「やがて人間を喰うに至る虎の子」のような子供たち、親の異端思想を党に告発する「小さな英雄たち」との同居を強いられた空恐ろしい場所以外の何物でもない。これとは逆に、悲劇の起こりえた過去においては、人間の

感情も威厳と深みを帯びていたのだし、人間の動作にしても私的忠節の証となつて、人の心をゆり動かさずにおこなつたのだ。私的世界の回復につかの間成功した主人公は、最近ニュース映画で見た一場面、というよりは動作の一つ——ヘリコプターによる銃撃から小さな息子の生命を護ろうと、その息子を抱き締めるユダヤ女の動作、観客の嘲笑の的となつたその動作——を思い出し、これを日記に書きつけずにはいられない。ユダヤ女の動作は、三〇年前に主人公の母親が示した動作の一つに重なり合うもので、主人公と母親と妹の三人が餓死寸前にあつたその頃、母親は時折主人公をひしと抱き締め、一言も発せず、長い間そのままじっと坐している事があつた、と語られる。ある時チョコレートチョコレートの配給があり、主人公は自分の分を既に受け取つていたにもかかわらず、凶暴な空腹の命ずるがままに、母と妹の分をも奪い取つて、家から走り出て行つたのだが、その時チョコレートの小片を奪われて弱々しい泣き声を発する妹を強く抱き締める事しかなかった母親のその動作（「その動作のどこかに、妹は間もなく死ぬのだ、と告げるものがあつた」）が三〇年の歳月を隔てて、主人公の胸に生々しく甦る瞬間がある。母親の動作の思い出が主人公を悲痛な感情の極に陥れるのは事実だが、それでもその動作は、私的世界の存在の証という意味で、ある充足感を主人公に与えずにはおかないのであり、母はプライベートな価値基準に従つて生きていたが故に、一種の高貴さ、一種の純粹さを保ち得たのだ、と主人公は悟る。「母の感情は母自身のものであつて、外側から勝手に変えられる底のものではなかつた」⁽¹⁶⁾。一つ一つの動作にしても、効果がないから無意味とは決して言えなかつたわけで、効果があるうとなかろうと、私プライベート的な動作はそれ自体で価値を持っていたのだ、と思う。価値あるものは、私的な忠誠、私的な関係、全く無力な動作、抱擁、一滴の涙、瀕死の人にかげられる一言であり、△歴史の潮流▽から抽出される観念や法則やイデオロギーの類のものではない。プライベートなもの、それ自体で価値を持っている。従つて党の恐るべき所業、

「党によってなされた恐るべき事、それは単なる衝動、単なる感情は無価値だと、人々に思い込ませる事に成功したその事なのである」⁽¹⁷⁾。

ここで必至となる問は、私的なものの消滅の上に文化は築かれ得るのか、である。答えは無論、否だが、それについては文学の擁護の観点から後述する事にしよう。

「歴史教育」の盛んな一九八四年の世界において、過去は廃絶され、歴史は停止してしまっている。党はつねに正しい、が定理となっている「永遠の現在」の他には何も存在しない、と語られる。党がつねに正しいとされる永遠の現在とは、本当の過去から完全に遮断された人工的な世界の事だが、このような世界は絶対的な権力の維持にとって、まさしくうってつけなのだ。かくてオウシニア国の支配階級の拠って立つ原理が「現在を制する者は過去をも制する」⁽¹⁸⁾である事に何の不思議もないという事になる。「現在を制する者は過去をも制する」は「現在を制しようと思つたら過去を偽造するに如くはない」と言い換えられ得るのであって、それは「社会主義」の歴史的必然や党の政策の不可謬性あるいは党指導部の予測の正しさを△証明▽するのに都合なように、過去が△面目一新▽される事を意味している。「記憶と記録」を意のままに操作し得る党にとって、歴史の偽造は苦もない業であるが、その苦もない業が国家の一大事業となっていているところに、全体主義国オウシニアの特徴はあるのだ。

党の権力者（オブライエン）は、リアリティは党の精神にしか存しない、党の目を通じないでリアリティを捉えようとしても、それは土台不可能だ、と言う。思い出によって甦る過去は、党の精神や党の目とは凡そ異質のものとして存するが故に、リアリティとは言えないわけで、党の公認の外にあるそういう△擬似リアリティ▽は、破壊されて

当然だ、という事になる。過去をも含めて一切を存在せしめるのは人間の（もつと正確に言うとうと党の）意識であるとする「集团的唯我論」⁽⁹⁾が、人民に対して絶対的な権力をふるう際に、頗る強力な拠り所となっているが、一方たとえば航海をする時とか日蝕を予知する時などには、この唯我論はあっさり放棄されるのである。

「集团的唯我論」に立つ限り、2 + 2 = 5であっても一向に構わない、どころか、時には絶対に2 + 2 = 5でなければならぬのであって、実際、党の権力者は2 + 2 = 5を否認する主人公を△匡正▽すべく、陰惨極まる拷問にかげさえするのだ。真理が客観的なものとしては存しない以上、何が真理であるかは、それ自体で完結した党の公的意識のなかでいわば検証抜きで、定言的命令の如く、決定されるのであり、公的意識の絶対化されたこのような世界において、「奇蹟」が日常茶飯事となっている。

一九三〇年頃からあらゆる面で、ものの見方の硬直化が始まった、という『一九八四年』中の記述から察すると、オーウェルは、集团的唯我論の発生、公的意識の絶対化を、遠い未来の危険としてではなくて、差し迫った危険として感じ取っていた、と言ってもよさそうである。ステイヴン・スペンダーは『一九八四年』の悪夢の如き世界は、一九三〇年代に現れた諸徴候をみつめた結果得られたものだ、という意味の事を語ったが、それは一九三〇年代に活躍したヨーロッパの知識人が『一九八四年』に描かれる知識人と酷似しているという事を意味するのである。全体主義国オウシアニアの権力集団は、一九三〇年代のヨーロッパの知識人と同様、啓蒙派、進歩派をもって自ら任じている階級であって、それは官僚、科学者、技術者、労働組合の幹部、宣伝・広告の専門家、社会学者、教師、ジャーナリスト、職業政治家などから成り立っている。そして彼らが知識人である事が彼らの「正気」を証明するものとはならず、逆に「狂気」を証明するものにしかならないという点が注目に値するのだ。オウシアニア国で密かに読まれて

いる「異端の書」によれば、「一般に知力が高まると幻想の度合も高くなるのだし、知力が高まるにつれて、正気の方は薄れていくのである」⁽²¹⁾。オウシアニア国の知識人たちは「過去の支配者に比べると、物欲、金銭欲などの点では劣っていて、贅沢品に魅せられるという事もないが、権力欲の強さ、反対派を粉砕しようとする意気込みの激しさの点ではまさっている」⁽²²⁾。殆ど無制限の権力欲が彼らの最も際立った特徴となっていて、この権力欲と「ユートピア」の構築との結合は、彼らの狂気を助長する働きをしこそすれ、彼らを正気に近づける所以のものとは、決してならない。なにしろ、知識人を中核とする党は、人民の利益のために権力を求めるのではなくて、権力それ自体のために権力を欲し求めるに至っていると語られるのだから。「権力は手段ではない、それは目的なのだ」⁽²³⁾、党は反動から革命を守るために独裁制を打ち樹てるのではない、革命は独裁制を永久に存続させるための手段に過ぎないのであり、「権力の目的は権力なのだ」⁽²⁴⁾。

『一九八四年』で浮き彫りにされているような知識人の狂気、あるいは知識人の知的不誠実は、一九三〇年代、四〇年代の時代環境においては、人々の目に、必ずしも明瞭に映じていたわけではない。というのも知識人は既存の体制（資本主義体制）に反逆する存在だったからで、知識人の反体制の姿勢は知的誠実の証のようにみなされてもいたからだ。オーウェルはそこで、一九八四年という未来の時代環境そのものを「拡大鏡」にして、知識人の生態を観察してみたのだ。すると知識人は紛うかたなく知的不誠実の徒と、オーウェルの目には映じたのだった。一九四四年、オーウェルは言った、昔は反体制と知的誠実が結びついていたが、今では反体制の人は同時に知的誠実にも反対している、と。⁽²⁵⁾

一九八四年の知的支配階級の知的不誠実は、無制限の権力欲の僕の観を呈する、「歴史教育」を通じて顕著に現わ

れる。この歴史教育の根幹は「革命」前の生活はあらゆる点で悲惨であったと強調する点に存するのだが、ある意味で粗雑極まるこの教育が絶対的権力の維持に役立っているのは、「革命」後の生活水準がどのように低下しようとも、それに応じて過去を一層悲惨に描いて見せれば、人民の側から不満の生ずる気遣いは全くないからである。過去の悲惨を強調する際に、公正な記録が一切存せず、しかも私的生活が皆無に等しいものとなっている社会での、人々の思い出の頼りなき加減が存分に利用されているのは、言うまでもない。(因にオーウェルの小説『動物農場』(Animal Farm, 1945)は、被支配階級の記憶の不確かさにつけこんで歴史を偽造する全体主義国の指導者を痛烈に諷刺したものである)。真つ当な感覚を喪失していないという意味で突然変異の如き主人公が、党の手になる歴史の教科書は嘘に満ちていると断言しようにも、拠るべき資料はどこにもない、あるのは「ただ骨の髄から発せられる無言の抗議、今の生活条件は耐え難い、昔はこれとは違っていたはずだという本能的な感情」⁽²⁶⁾だけである、と叙述される。「歴史教育」の徹底によって「一切は霧と化する。過去は拭い去られ、拭い去るといふその行為は忘れられ、嘘が真実となる」⁽²⁷⁾。

主人公のこうした眩きは、過去をいとおしむ気持の表出と受け取らるべきで、一見無力感の表出の如きこの眩きにしても、ひとたび「歴史教育」の傍らに置かれると、異常にその△比重▽を増してくる、と言わなければならない。つまり、思い出や伝統の感覚の抹消の上に成り立つ「歴史教育」が一種の△反面教師▽となって、主人公の正気は否応なしに引き立たってくるのだ。

主人公は「プロル」(IIプロレタリアート)の居住する貧民窟の酒場で、「革命」発生時に既に中年の域に達していたに違いない八〇歳ぐらいの老人を掴まえて、革命前の社会の思い出を語らせようとする。主人公は、歴史の教科

書に書いてある事、即ち革命前の社会は想像に絶する程ひどい圧制や不正や貧困に満ちた社会だったという記述は正しいのか、という意味の問を發する。主人公が同様の問を幾度發しても、返ってくるのは「屑の山のような些末事」であって、真の情報ではない。けれども主人公がそういう問を發しうる事自体が「歴史教育」の虚妄を暴きだす重大な端緒となっている事は、否定のしようがないのだ。

主人公は、次に、以前日記帳を入手した店で、危険を承知の上で、半円形のガラスの文鎮を買ひ求める。中に珊瑚が埋め込まれ、雨水のように柔らかい感じを与えるそのガラスのかたまりは、「現代とは全く違つた時代に属している」という感じを漂わせているが故に、また「無用の長物」という感じを与えるが故に、主人公を魅了してやまないのだ。その文鎮に魅せられる主人公は、実は、廃絶された過去、及びその過去に固有の私的世界に魅せられている、と言える。思い出が意識的に破壊され、あらゆる書物や文書、映画、録音盤などから本当の過去が消し去られてしまつた今、過去は思いがけない場所で偶然入手したガラスの文鎮となつて、つかの間、確実に甦るのだ。

さらに主人公は、I love you. という頗るプライベートな言葉を書きつけた紙片を、一瞬の好機を利用して主人公の掌中に滑り込ませる女との密会に成功する。この密会自体、私的世界の確保、即ち価値の確保を意味するが、女が党を罵る時に使う荒っぽい言葉もまた価値につながっているのである。荒っぽい言葉の使用は「党とそのやり口への反逆の一つの徴候であり、どういふわけか、それは自然で健全なもののように思われた」⁽²⁸⁾からだ。衣服を脱ぎ捨てる時の、女の大膽極まる動作もまた、過去に属するが故に価値を帯びているのであり、その動作は「ユートピア」の文明全体を破砕するようにさえ思われてくる。徹底的な墮落もまた価値とみなされるに至っているが、考えてみれば、墮落は、私的世界を確保した人間にのみ許された特権なのかも知れない。してみれば、公的世界にしか棲息でき

ない手合には、 \wedge 純潔 \vee が見合っている事になるのだが、墮落は既に『ビルマの日々』(Burmese Days, 1934)の中で「ユートピア」(「公」一辺倒の世界)に見事対置されているのだ、「思いぎり墮落しろよ、そしたらユートピアの実現は先へ延ばされる事になるからな」⁽³⁰⁾という表現を通じて。

三 「社会主義」と知識人

『私的世界』を価値として確保しようとする態度は『空気を求めて』(Coming Up For Air, 1939)の主人公にも認められる。この小説のテーマは、たとえ無学であっても私的世界を保つ事のできる人は健全である、というものだが、プライベートな世界は「内部に宿る特殊な感情、平静、一片の孤独」⁽³¹⁾と表現され、これに別れを告げなければならなくなるのが何よりも怖い、と語られている。孤独や心の平静を許さないような、即ち私的世界を許さないような「平和」は恐るべきものだとする見方も、そこから出てくるのであって、確かにオーウェルは『空気を求めて』と『一九八四年』の中で、思い煩ったり、恐怖したりする事に明け暮れる「平和」、常に正しい事がスローガンとなって叫ばれているながら、一片の孤独、特殊個別的な感情の存在を許さない「平和」は恐ろしいものだ、という見方を提出している。

『空気を求めて』の主人公は断言する、せきたてられていないという感じ、何も恐れるものがないという感じ、この感じは一度でも味わった事のある人なら贅言しなくても解るが、若年の頃に一度として味わった事のない人には、一生不可解の謎として残るだろう、と。また言う、戦前(第一次世界大戦前)の人々は、未来を何か恐ろしいものと

はみなしていなかった、といっても生活が楽だったわけではない、生活は今よりも厳しかったし、人々は今よりも一生懸命働かねばならなかった。にもかかわらず、戦前の方が時代としてはましだった、死や破産が目前に絶えずらつてはいても、人々は物事の秩序は昔と変らぬ姿のまま存続するだろうと信ずる事ができたからである。生活が安定していない場合でも、戦前の人々は安定感を抱く事ができたのであり、この安定感は、ゆるぎない道徳の感覚と結びついていたのである、と。そして主人公は思う、大切にしているものが存続するというのであれば、善も悪も昔に変わらず残るといふのであれば、即ち道徳が変らないのであれば、死ぬのは苦にならない、と。

大戦前の無学の人々が私的世界をしっかと保っていたのとは対照的に、現代のインテレクトチュアルは、「私的世界」を喪失し、代りに「ユートピア」の構想に取り憑かれるに至ったのであり、その結果、ファシスト臭い人の顔を、いわば次から次にスパナで打ち砕かないうちは、気も休まらないうちの生活が彼らにとっては恒常的となっている。「正しい世界観」を説き、「ファシスト」への憎しみを語り続けるうちに、この手の知識人の内面を占めるのは、権力欲だけという事になるのであって、地球の表面を愛する気持——野の中の小さな残り火に感動する心、小さな水溜りの中の草のたたずまいを独り楽しむ心——を無価値なものとして斥けて、倦まず弛まず「反ファシズム闘争」を行った場合にのみ、日々は充実してくる、と彼らは思い込むのである。

『空気を求めて』の中でオーウェルは、禿を薄い髪で隠そうと工夫を凝らしている四〇歳位の「有名な反ファシスト」を登場させているが、この男を評して主人公は次のように呟くのだ。この男が意図的にやっている事は、憎しみを煽り立てる事、即ちファシストと目される人々への憎しみを煽り立てる事である、けれども反ファシズムというのは奇妙な職業と言わなければならない、ヒトラー反対の本を書く事で生計を立てているこの男は、ヒトラー登場以前

は何をしていたか、ヒトラーが消え去った後は何をするつもりであるか。彼の体を仮に切り裂いて覗いてみたとしたら、みつかるのは民主主義―ファシズム―民主主義だけだろう。彼の夢でさえもスローガンに満たされているに相違ない、と。価値は私的世界の確保に存すると信ずる主人公にしてみれば、戦争それ自体は問題ではないのである。むしろ、戦争をめぐって生ずる、憎悪やスローガンにみだされた世界が問題なのだ。ファシズムそれ自体は問題ではない、ファシズムをめぐって生ずる憎悪とスローガンにみだされた世界が問題なのだ。同様にオーウエルは、「リア、トルストイそして道化」と題するエッセーの中で言う。「本当に重要な相違は暴力と非暴力の間にあるのではなくて、権力欲を持つか、持たないかの間にある。軍隊や警察の悪を信じている人の方が、ある場合には暴力の使用もやむをえないとする普通の人よりもはるかに、非寛容で、大審問官風の物の見方をするのだ。この手の人間は、誰か他人に向かって『これこれの事をしろ、さもないと牢獄行きだ』とは言わない。しかし、できる事なら他人の脳髓の中へ入って、その思想を極小の細部に至るまで統制したいとは思っている。平和主義やアナキズムは、一見すると権力を完全に否定しているように見えるけれども、その実、権力欲を助長する底のものなのだ」⁽³²⁾。

平和主義やアナキズムに限らない、「社会主義」もまた権力欲を助長する働きをする事を、オーウエルは夙に見抜いていた。それは「社会主義」の推進役が常に知識人によって担われているからであり、そして知識人ほど権力欲の強い動物もいないからである。「ジェイムズ・バーナムと管理主義革命」の中ではオーウエルは、知識人の権力崇拜は臆病と密接な関係があり、知識人が全体主義体制の残虐行為を讚美する際には、この臆病が一役買っている、という意味の事を語っている。「イギリスの知識人がソビエト体制にひきつけられるようになったのは、ソビエト体制が紛うかたなく全体主義的となつてからである」⁽³³⁾とまずオーウエルは言う。オーウエルによれば社会主義が実現すべ

きものは何よりもまず、自由と平等であるのだが、ロシアにおいてはマルクス主義の政党が権力を握るや否や、日ならずして社会主義は放棄された、即ち「自由は削り取られ、代議制は窒息させられ、不平等は拡大し、国家主義と軍国主義はますます強固になっていった」⁽³⁴⁾。ロシアにおいて「一九二三年よりはるか以前に、全体主義社会の種子が蒔かれていたのは明白なのであり」⁽³⁵⁾、仮にトロツキイが権力を握っていたとしても全体主義の方向に変わりはなかっただろうし、レーニンがもう少し長生きしていたら、彼はスターリンにまさるとも劣らず野蛮なやり方で、権力の維持に努めた事だろう。ところで知識人は政治的予測を好んでする動物でもあり、その予測は、今、現に起きている事がそのまま持続するとみなす事から成り立っている。つまり現在勝っている勢力は常に無敵と思ひ込む事から成り立っている。このような予測こそは怯懦の産物なのであり（スタンダールは「弱気が生じさせる故意の錯覚」という表現を用いた）、これを後生大事にかき抱く事がそのまま権力崇拜に通じている。オーウェルはこのような予測を「大きな精神の病」⁽³⁶⁾と呼ぶのであり、この病ゆえに、ナチドイツが圧倒的に勝ちいくさをすすめていた期間（一九三九―四二）、イギリスの左翼インテリゲンチヤは、反独感情を著しく薄めたのと言うのだ。しかし知識人は己れの怯懦を気取られたくないから、厳かに、全体主義への歴史の潮流は逆らい難いものだ、これに抵抗するのは有害である、などと宣するのである。

オーウェルは既に一九三〇年代に、ソビエト体制の仮面を剥ぎ、その全体主義的本質を暴き出したのだったが、そのオーウェルが社会主義者であった事は驚くべき事だろうか。彼はたしかに社会主義者であった、けれどもマルクス主義者となる事は肯んじなかった。「マルキシズムはロシア人によって解釈されたドイツの理論であって、イギリスに移植されても根づく事などなかった理論」であったからだ。マルキシズムは「イギリス国民の心に真に触れるもの

を何一つ蔵しない⁽³⁷⁾」理論だったからだ。彼が信じたのは自由と平等を実現してくれる社会主義であって、「二、三年毎に死体の山を築かなければやっつけられないような体制⁽³⁸⁾」ではなかった。彼の信ずる社会主義は「教条主義的でない、いや理論的でさえない」社会主義、「王制を廃止せず、時代錯誤やその他の遺物も残しておく」社会主義、プロレタリアートの独裁とも縁のない社会主義、「妥協の伝統から離れる事もなく、国家より上位にあるものとしての法への信仰を失わない⁽³⁹⁾」社会主義であった。要するに、彼の信じた社会主義は、「ごく普通の真の当な感覚」を基礎とし、それから決して離れる事のない社会主義であった。「ごく普通の真の当な感覚」は常識と称してもよいのだが、オーウェルにとって、そういう感覚に訣別した「理論家」の行う独裁ほど恐るべきものはなかった。この種の理論家は、私有財産制が廃止され、被支配階級が「解放」されると自動的、に、万事はうまく収まるに相違ないと考える。けれどもそういう理論家は「二、三年毎に死体の山を築かなければやっつけられない体制」はどこか狂っていると感じ取る事すらできないのだ。

オーウェルは『ウィガン棧橋への道』(The Road to Wigan Pier, 1937)の中で、ファシズムのめざす社会は経済的には利潤の原理抜き集産主義が確立され、政治的、軍事的、教育的には権力が少数の支配階級の手握られている社会である、と言っているが、読者はオーウェルの取り上げるファシズムが、現在の「社会主義」に酷似しているのに、一驚を喫するのだ。オーウェルがファシズムの社会だとしているのは、現在の「社会主義国」(実は全体主義国)で見事に実現されているのではないか。そして読者は、彼の唱える社会主義は、西側自由主義国と称せられる国でこそ実現されつつあるのではないか、という感じを抱かせられるのである。「真の社会主義者は圧制の転覆を欲する——単に好ましいと思うだけでなく、積極的に欲する——人の事である⁽⁴⁰⁾」。この引用文の社会主義者は自由主義

者に置き換えられうるはずである。

『一九八四年』の全体主義国は「真っ当な感覚」を喪失した知識人たちによってつくりあげられた「社会主義国」である。それは人民の無知と貧困を、階級制の社会存続のために、必要不可欠の条件としている社会である。この国の支配層は、富の増大とその平等な分配によって人民が貧困の恐怖から解放されて余暇を得、その結果独自の仕方での仕事を考えるようになると、社会の不安定化が招来されるに相違ないと考えている。そこで、支配層は富の増大を防ぐべく、物資や製品の人工的破壊に役立つ戦争の遂行に躍起になっている。戦争とはいっても、国家の存亡にかかわる総力戦ではなくて、曖昧な国境線地帯の争奪といった趣を呈する局地戦であるが、そういう戦争を絶え間なく行っているために、五〇年前に比べると生活水準では原始的と称してよい社会が現出するに至っている。科学・技術の方は、兵器や人民監視のための装置・道具の開発を除くと、至って低い水準に抑えられている。元来、科学・技術の基本的な意義は、生産力を高めつつ人間の労苦を減少させ、余暇を生みだすところにあるはずだが、科学・技術のそういう基本的意義がこの国では一向に顧みられないのだ。全体主義国の支配層の最高の目的は、権力を一手に集中し、これを永久に保持する事にあるから、科学・技術が人民を、飢え、過労、汚穢、文盲、病氣などから解放し、とどのつまり人民の知的水準や批判力の向上に資するような事があってはならないのである。人民に思考する暇を与えない程に過重な生産活動を課し、人民の最低限の生活の必要を充たしさえすれば、その余の生産物は戦争を通じて人工的に破壊・費消する事、これがオウシニア国の基本政策なのだ、と語られる。

さらにオウシニア国の権力者たちは戦争には人民から正気を奪う効用がある、という事にも気づいている。「過去においては戦争は、人間が物理的な現実と接触を保つための主要な手段の一つであった⁽⁴⁾」。勝敗が余りにもはつき

りしていたから、敗北を避けるための準備は真剣なものとならざるをえなかった。人民にしても、軍事的努力に真剣に取り組む限り、たとえば2+2=4という理解は必須だった。勝敗という動かし難い、冷厳な現実⁽¹⁾に人民を直面させる戦争は「正気の安全弁」だったとさえ言える。まさしく一国の命運を左右する外的危険が戦争という形で存在していたのであり、それは人民に正気をもたらすという副次的作用を伴っていた。ところがオウシニア国の場合のように、戦争を恒常的に、しかも国の存亡に関係なく行えるようになると、人々が動かしようのない現実と真剣に直面する必要もなくなるわけで、2+2=5であっても不都合は何ら生じないという事になる。一九八四年の全体主義国においては、人民はもともと過去と外界から遮断された閉鎖的な宇宙、超現実的な宇宙に棲んでいるのであって、そこへ超現実的な戦争の遂行が重なる⁽²⁾と、その相乗的な効果は、権力者にとってこの上なく好都合なものとなる。権力者が人民の意識を限りなく分裂症的にし、人民から正気を奪い、人民の思考を歪にするのが易々たるものとなるからだ。かくて物理的現実⁽³⁾に直面する必要を感じ、その結果効率のよさを誇りうるのは、終局的には秘密警察だけという事になるのだが、「このような国家の支配者は絶対的となるのであり、ファラオやカエサルも彼らの比ではない」。

以上戦争についての叙述は明らかに諷刺であるが、この諷刺の無気味さは、大国間の力の均衡によって全面戦争が防止され、△平和▽が一応保たれている状態自体は、必ずしも価値ではないと教えている点に存する。

四 文学と政治

全体主義国オウシニアの特徴が叙述される箇所で一際読者の注意をひくのは「畑は馬に引かせた犁によって耕さ

れているけれども、本は機械によって書かれている」という一句である。⁽⁴³⁾この一句の意味するところは、生活は極度に低い水準に抑えられているのに、抑圧の手段は高度に発達しているという事、それから私的世界の滅ぼされた政治万能の国においては、文学も絶滅させられるよりほかはないという事である。(実際、この国では、小説の〈生産〉に携る人間は油で汚れた手にスパナを握っている、という珍妙な光景が見られるのである)。

けれども、オーウェルにとって主要な関心事は、全体主義国における文学の消滅(それは、さしあたりどうしようもない事だ)というよりはむしろ、自由な国において作家たちが「知的誠実を不可能にする一種の社会主義」⁽⁴⁴⁾に魅せられていくという問題であった。何故に作家たちは、作品の制作を不可能にするような全体主義に魅せられるのであるか。なるほどマルクス主義者は「ブルジョワ流の」思想の自由などは幻影に過ぎぬ、といともたやすく証明してみせはする、しかしそう証明してみせたところで、この「ブルジョワ流」の自由がなければ、創造力は衰退するばかりだという心理的事実はいかんともしがたいではないか。我々の知っている文学は個人の産物であり、それは知的誠実と、できるだけ少ない検閲をこそ要件としているのだ、とオーウェルは言う。知的誠実とは、シェイクスピアの「汝自らに忠実であれ」という文句で表わされるような誠実さの事で、それは作家が本当に考えている事、本当に感じている事を表出する事を意味するに過ぎないが、自明なはずのこのような知的誠実がことさらに擁護されねばならぬところに、今日の文学と政治の問題が鋭く顔を覗かせている、と言える。「創造的作家にとっては『真理』の所有よりは、感情の誠実さの方が重要である」⁽⁴⁵⁾とわざわざ理する事自体が政治批判(もっと正確には全体主義的風潮批判)となっている点に、読者は注意しなければならない。全体主義国ではない国、「自由な」はずの国において、政治と文学の問題がこのような形で現れるという事実は、政治が、いかに「正しい世界観」や「真理」や「正統」の威を借り

て、私的営為に他ならぬ文学を脅かすに至っているかを、雄弁に物語るものである。

オーウェルは文学と政治の今日的關係を、一九三〇年のイギリス文学を通じて明らかにしようとしたのである。オーウェルの見るところでは、一九三〇年代は自由を最も重んじて然るべき人々が、自由の意識的な敵となっていた時代であった。彼らは、既存の秩序に反抗すると同時に、知的自由にも反抗するという新種の（そしてそれ以後西側諸国で一般的となった）反体制派の特徴をみせていた。ファシズム反対と民主主義の擁護を唱える彼らは、当然の事ながら、真摯な目的意識に燃え、文学においては技法よりも主題を重んじた。そして「正しき証明済みの世界観」の所有者をもって自ら任じ、読者に向かっては、何が正しい考えであるかを説くのに余念がなかった。が、文学の世界から普通の人間を放逐しようとした彼らの試みは、イギリスの庶民には一步も近づき得ないという皮肉な結果に終わってしまった。とはいえ、人民戦線が猛威をふるっていたこの頃、何らかの意味で左翼でないような人は変人扱いされはじめていたのであって、左翼でない作家は、文章も下手だとみなされていた。かくして「左翼正統」(left-wing orthodox)なるものが生じるに至ったのだが、その時「イギリス文学の主流は多かれ少なかれ共産党の直接的な統制を受けるようになったのである」⁽⁴⁶⁾。そして文学がイギリス共産党の統制下に入るといふ事は、文学が「ソ連の外交政策の道具に成り下がる事」⁽⁴⁷⁾を確実に意味していた。ところで一国の外交政策ほど知的誠実から縁遠いものもないのであり、従ってソ連の外交政策のお先棒を担いでいた一九三〇年代のイギリスの文学者たちが知的誠実を保てる道理などなかった。実際、人民戦線にかぶれた作家たちは、権謀術数を事とする大国の、くるくる変る政策に、己れの「信念」を適合させる破目に陥ってしまった。「全体主義は信念の時代というよりはむしろ、分裂症の時代を約束する」⁽⁴⁸⁾というオーウェルの定言は、全体主義の雰囲気醸成に一役買い、かつその雰囲気に深々と浸っていた彼ら文学者たちの振

舞い方を横目で睨んで発せられたものなのだ。

けれども、分裂症的な「信念」であれ、それが「正統」の名において文学に滲み込むや否や、「恐れる事なく思考する」事は不可能となり、自然の成行きとして自主検閲が文学者たちの間で流行るようになった。創造的作家にとつて必須の、「恐れる事なく思考する」態度が喪われた一九三〇年代について、かくて次のように結論が下されるのは無理もないのである。

小説についていえば、一九三〇年代ほど不毛であった一〇年間は、過去一五〇年間のイギリス文学史上、なかつた。⁽⁴⁹⁾

「どのような思想であれ、作家がそれを自由に辿っていくと、禁じられた思想に立ち到る危険が常にある」。⁽⁵⁰⁾ 禁じられた思想とは私的世界に育まれる思想の事であり、思想が私的世界で育まれる事こそが思想の自由の実質をなすと言つてよい。そして作家の誠実は、私的世界を確保する事に尽きているのだが、その私的世界は、無論、公的世界と相容れぬものを多分に含んでいる。私的世界は、なかならず正統という名の公的世界とは鋭く対立する。私的世界がどんなに愚劣で他愛ないものに見えようと、これを△正統的な▽公的世界に隷属させない事、それが文学制作の第一条件である、と言つてよく、「正統思想」のために「禁じられた思想」を窒息させる文学者・知識人は、それだけで既に、自由の敵に成り果てていると言い得るのだ。「長い目で見れば、知識人自体の知的自由に対する欲求の衰弱が、最も深刻な徴候である」⁽⁵¹⁾とオーウェルは言っている。

五 結 び

オーウェルは、現代における最大の悪を権力の異常肥大、と捉え、権力の異常肥大を特徴とする全体主義への崇拜を生みだすのは、社会を完全無欠なものにしようとする知識人のユートピア主義、それから同じく知識人の、長い物には巻かれる式の臆病であると診断した。

社会主義者オーウェルは、社会主義の目的は完全無欠な社会の建設ではなくて、自由と平等の社会の建設でなければならぬ、と考えていた。自由と平等の社会への願望は、彼の場合、その余の問題、即ちこの宇宙に人間が人間として棲息する限りつきまとう根本的な問題がいつの時代にも、未解決のまま残されると悟る事と矛盾しなかった。つまり彼は、彼の信ずる社会主義が実現しても、「私的世界」は残されていなければならないと信じていた。制度を変えさえすれば道德的進歩が自動的に得られるはずだとする考え方は、彼から縁遠いものもなかったのである。そういう考え方の誤謬を、「真の当な感覚」の持主はたちどころに見抜けるのだが、現代の知識人に欠けているのは他ならぬこの「真の当な感覚」である、と彼は考えていた。

オーウェルは、これまでのところ歴史は経済的自由が失われれば知的自由も失われる事を証している、と言った。そして「文学の価値を感じ取っている人、文学が歴史上果たす中心的な役割を理解する人は誰であれ、全体主義——他国から押しつけられるにせよ、自国内に発生するにせよ——に抵抗する事の死活的必要を悟らなければならない」と言った。

しかし社会主義者オーウェルにとって、社会主義が経済的自由の制限、あるいは経済の統制を意味していなかったはずはなく、事実彼は「全体主義的ではない社会主義、経済的個人主義が消え失せても、思想の自由が生き延びられるような社会主義」の出現に希望を⁽⁸⁾つなく、と言っている。読者はオーウェルのそういう希望に、ある空しさを覚えないわけにはいかないのである。

(註)

- (1) George Orwell, *The Collected Essays, Journalism and Letters of George Orwell*, eds. Sonia Orwell and Ian Angus, Vol. W, London: Secker & Warburg, 1968, p. 41.
- (2) *The Collected Essays, Journalism and Letters of George Orwell*, Vol. I, p. 5.
- (3) *Ibid.*, p. 6.
- (4) *Ibid.*, p. 6.
- (5) *Ibid.*, p. 531.
- (6) *The Collected Essays, Journalism and Letters of George Orwell*, Vol. W, p. 143.
- (7) *Ibid.*, p. 143.
- (8) *Ibid.*, p. 144.
- (9) *Ibid.*, p. 144.
- (10) Herbert Read, *George Orwell The Critical Heritage*, ed. Jeffrey Meyers, London and Boston: Routledge & Kegan Paul, 1975, p. 285.
- (11) Pascal, *Pensées*, Paris: Éditions Garnier Frères, p. 109.
- (12) George Orwell, *Nineteen eighty-four*, London: Secker & Warburg, 1949, p. 84.
- (13) *Ibid.*, p. 84.
- (14) Golo Mann, *George Orwell The Critical Heritage*, p. 281.

- (15) George Orwell, *Nineteen eighty-four*, p. 38.
- (16) Ibid., p. 169.
- (17) Ibid., p. 169.
- (18) Ibid., p. 254.
- (19) Ibid., p. 272.
- (20) Stephen Spender, *Twentieth Century Interpretations of 1984*, ed. Samuel Hynes, Englewood Cliffs, New Jersey : Prentice-Hall, 1971, p. 64.
- (21) George Orwell, *Nineteen eighty-four*, p. 221.
- (22) Ibid., p. 211.
- (23) Ibid., p. 269.
- (24) Ibid., p. 269.
- (25) *The Collected Essays, Journalism and Letters of George Orwell*, Vol. IV, p. 60.
- (26) George Orwell, *Nineteen eighty-four*, p. 77.
- (27) Ibid., p. 78.
- (28) Ibid., p. 95.
- (29) Ibid., p. 126.
- (30) George Orwell, *Burmese Days*, London : Secker & Warburg, 1934, p. 44.
- (31) George Orwell, *Coming Up For Air*, London : Secker & Warburg, 1939, p. 169.
- (32) *The Collected Essays, Journalism and Letters of George Orwell*, Vol. IV, p. 301.
- (33) Ibid., p. 179.
- (34) Ibid., p. 164.
- (35) Ibid., p. 168.
- (36) Ibid., p. 173.

- (37) George Orwell, *The Lion and the Unicorn*, London : Secker & Warburg, 1941, pp.85~86.
- (38) *The Collected Essays, Journalism and Letters of George Orwell*, Vol. I , p.532.
- (39) George Orwell, *The Lion and the Unicorn*, p.86.
- (40) George Orwell, *The Road to Wigan Pier*, London : Secker & Warburg, 1937, p.220.
- (41) George Orwell, *Nineteen eighty-four*, p.203.
- (42) Ibid., p.204.
- (43) Ibid., p.198.
- (44) *The Collected Essays, Journalism and Letters of George Orwell*, Vol. I , p.514.
- (45) Ibid., p.523.
- (46) Ibid., p.512.
- (47) Ibid., p.513.
- (48) *The Collected Essays, Journalism and Letters of George Orwell*, Vol.Ⅳ, p.67.
- (49) *The Collected Essays, Journalism and Letters of George Orwell*, Vol. I , p.518.
- (50) *The Collected Essays, Journalism and Letters of George Orwell*, Vol.Ⅳ, p.65.
- (51) Ibid., p.64.
- (52) *The Collected Essays, Journalism and Letters of George Orwell*, Vol.Ⅱ, p.137.
- (53) Ibid., p.137.